

### 1. 流域づくりの視点(背景)

発電、農工業、水運など、上流から下流まで、流域の人々の営みは川に支えられてきた。(利水) 面的に広がる水路網

かつては住民が自ら川の災害から地域を守っていた。高度成長期以降、工事規模が拡大し、行政による管理が進むにつれて、人々の川に対する関心が薄れた。それでも、より激しい豪雨により水害は続き、都市人口増加と宅地拡大により、危険性は増加している。(治水)

河道整備の限界、面的で総合的な治水対策へ

社会活動が活発になるとともに、大量の水を使い川を汚した。時代が変わり、川をとりまく生態系、河川環境の大切さが理解されてきた。(環境) 面的な水利用システムが大きく影響

人々と川との関わりは「線」ではなく、「面的」であり、流域単位の取り組みが重要

### 2. 住民が主人公の流域づくり(主体)

住民主体で流域のあり方を考え、合意形成を図って新しい時代にふさわしい流域像を描き、行政と協力して流域づくりに取り組むことが大切。

被災の有無などによって川に対する意識や関心が異なる知識や関心があっても、行動に移せないのが現状。環境や川の安全や親しみやすさを感じる基準には共通性がある

川との触れ合いを促進し、知識や意識を高め、対話や協働を通じて水害の危機感を共有する機会を設ける。

認識や考え方が共通する点を核として、住民相互・住民と行政が合意形成をはかりつつ、流域づくりに取り組んでいく。

### 3. 安全で親しみのもてる流域づくり(目標)

#### 治水

都市づくりの過程で、低地の土地開発が進行し、危険性が増大。中山間地では人口減少や高齢化により地域の防災力が低下

合意に基づく選択的な集中投資によるハード整備。総合的な対策による被害の最小化(減災)を意識。地域ごとの特性を踏まえた土地利用の規制・誘導、情報提供等のソフト対策の充実

地域住民が主導する地域防災力の向上へ

**社会経済の変化を踏まえた地域の「災害文化」の醸成**

#### 環境

豊かな水と緑のある自然環境、それを背景とした歴史的・文化的景観は関川流域の誇りうる資産。

**この風土が、地域住民の良好な生活環境を生みだし、来訪者にとっては大きな魅力**

長い歴史を通じて人と自然の営みによって形成された関川流域の水のネットワークの価値を問い直し、保全再生にとりくむ。

**原生自然のみでなく、人と自然の関わりの中で生まれる二次的自然の保全、適正な維持管理が必要。**

個別の対象だけでなく、周辺環境、土地利用を含めた保全が不可欠。

### 4. 時代を見通した流域づくり(戦略)

#### これからの時代

財政縮小、環境制約のもとで、人口減少が進む。中心市街地の縮小や人口密度低下、地域活力低下や低未利用地の増加。既存ストックの適切な維持管理が懸念。

これまでの自然的土地利用から都市的土地利用への流れだけでなく、逆方向の地域運営も必要。地域活力を維持向上し、豊かな自然環境と安全でゆとりのある生活環境を生み出していくためには、関川流域の水のネットワークの価値の再構築がカギ。

#### 治水(安全面)

財政的に、全危険地域を一律かつ早急に整備するのは困難。

住民合意のもとに、選択と集中によるハード対策と、ソフト対策を中心とした補完的な防災対策により被害を低減

人口減少により生じる余裕を利用して、**防災拠点やオープンスペースを確保**。必要に応じて土地利用の見直しによる**災害危険地域からの人や資産の誘導**など、土地利用の計画的な整序・集約化と自然環境の再生・活用などを進める。

#### 環境

20世紀に喪失しがちだった地域の個性やアイデンティティを復活。人間による一方的な自然利用の思想を転換

水の量や質、水流が運ぶ土砂や栄養塩を含めた健全な水・物質循環システムを流域に再現

河川流域という空間の連続性や水や物質の健全な流れは、多様な自然とそこに関わる人間の営みのつながりを自ら提示し、流域や水に基調をおいた新たな時代に適応できる社会基盤構築の芽を育てることになる。